

第 6 回秦野丹沢野外彫刻展「OMOTAN Sculpture Award」

審査講評

今回秦野市は、約 20 年ぶりに野外彫刻展のコンペを開催することになりました。これまでのような市内の中心部ではなく、丹沢山麓の「県立秦野戸川公園」の入口近くと、その反対側の「はだの丹沢クライミングパーク」の斜面という 2 か所を設置場所に選んで公募されています。それぞれ 50 点、41 点の応募作品がマケットとして提出されました。それらを、私を含め 6 人の選考協議会委員が審査し、候補地ごとに 4 点の入選作を選び、そこからさらに 70 周年記念賞 1 点ずつを絞り込むことにしたのです。

全体としての印象は、限られた準備期間にもかかわらず力のこもったマケットが揃っているというもので、選考と協議にはやや困難が伴いました。委員も、場合によっては、自分以外の誰も推さない作品に関して、推薦の弁を述べ、もう一度、全員でそれを含めて見直し、検討するというような手間をかけての選定作業となったのです。

委員全員が、まず設置の現場を事前に確認してからの審査でしたので、マケットに対面したとき完成作と場所との関係を思い浮かべ、ひとつひとつマケットを吟味し、審査を重ねていくことになったわけです。それは秦野市の自然環境をとりわけ意識することでもありました。ただ抽象と具象というようなカテゴリーを基準にすることはもちろんできず、また、マケットそのものが備えている技量という即物的な価値判断だけでも、最終的な結論に達することはできなかったはずです。

秦野の豊かな自然。それをさらに際だたせてくれる優れた表現。そして、逆に自然からもエネルギーを受け取り、輝きを増すような性格を備えた作品。そういった環境との対話性が今回、審査の過程で重視されたのです。

「県立秦野戸川公園」の方は、設置場所周囲の間近に植栽があり、施設などもやや近接しているために、その中に共存できるような作品である吉田隆氏の《星に向かう樹》が 70 周年記念賞に選ばれることになりました。鹿や樹木といった具象的なモチーフが、写実というよりも物語の方に力点を置いて強調されていることもあって、大地と天空との対話が秦野の郊外の地に生まれることが期待されたのです。

一方、「はだの丹沢クライミングパーク」は、水無川を見下ろし、西方向へと大きく開けた斜面が設置ポイントであり、そこに自然石のフォルムを拡大し、それを多色の釉薬を施して焼成させた陶土で仕上げる作品である、松岡圭介氏の《巨石に就て》が 70 周年記念賞の受賞対象となりました。大地そのものの記憶ともいうべき自然石を基に、最終的に手わざを駆使して色彩あふれる存在となる。自然と人とを繋ぐ象徴ともいうべき作品として評価されたのです。

なお、入選作 8 点のそれぞれについては選考協議会委員による解説がありますので、ご一読ください。

委員長 水沢 勉

第 6 回秦野丹沢野外彫刻展「OMOTAN Sculpture Award」選考協議会委員

- | | |
|-------------------|----------------------|
| ・水沢 勉（美術史家・美術評論家） | ・米林 雄一（彫刻家） |
| ・團 紀彦（建築家） | ・土方 明司（川崎市岡本太郎美術館館長） |
| ・篠原 聡（東海大学准教授） | ・内田 賢司（前秦野市副市長） |

入賞・入選作品解説

吉田 隆作《星に向かう樹》

敷地のバスロータリーは遠景の連山を望む丘の上にあり、植栽帯、照明ポール、周辺の建築物など幾つもの要素が混在した場所であったために、彫刻作品がどのようにその存在感をアピールするかが問われる場所だった。

この作品は抽象彫刻の提案が多い中で数少ない鹿を象った具象作品である。金属で構成されたこのモニュメントはそれ自体が秦野の自然を連想させるものであり、周囲の文脈に埋没することなく、この場所の「気」を高めるだけの凜とした存在感を示していたことにより最優秀案に選定された。

(團 紀彦)



松岡 圭介作《巨石に就て》

まず色鮮やかなモザイク模様が目を引く。一般的な彫刻の通念から大きく逸脱し、自由な遊び心に満ちている。

しかし、制作発想の起点は単なる思い付きではない。日本の彫刻史上、特異な位置を占める橋本平八の「石に就て」のオマージュを意識し、独自の自然観に基づく作品となっている。

背景となる周囲の山々、カラフルなボルダーウォールにも呼応し、訪れる人を楽しませる作品として評価した。

(土方 明司)



宮坂 慎司作《映す帆》

丹沢山麓を吹き抜ける風を受け、揺らめく帆をイメージした作品。形の中央は孔が空き、遠景を映す。波に揺られ摩耗した貝殻のような形にもみえ、その造形性が高く評価された。

戸川公園の美しい景色はそれだけでも成立するため、「彫刻の向こう側にある景色」との共生をコンセプトとしている。帆は、山を背景とし、側面から見ると微風にそよいでいるような形で、背面からは風を受けた帆と共に踏み出すイメージを託したと作者はいう。

(篠原 聡)



武田 充生作《環》

作者の作品説明のように、「山の摂理である循環をイメージした。胎児、勾玉、祈り」。登山の中で大地を踏みしめながら「環」を感じてほしいと。

石彫加工の難しさがある中で、自然石の中に力強さ、優しさ、安定感、そして楽しさもある作品だった。

登山愛好家の「登山は丹沢に始まり丹沢に終わる」の言葉が表すように、将来の維持管理や安全性、耐久性も踏まえ、表丹沢の登山口に相応しい作品と思った。

(内田 賢司)



水本 智久作 《Natural Posture 「メグル」》

『Natural Posture 「メグル」』は、水本智久氏による作品で、丹沢の登山ルートを登ったり降りたりする過程を抽象的に表現しています。

二つの円は、それぞれ安全なルートとハードの登山ルートを象徴しており、その三次元曲線の形状の変化が印象的です。鏡面仕上げのステンレスは外光を反射し、見る角度によって異なる表情を楽しませてくれます。接合部が隠れるデザインも洗練されており、作品全体に高い完成度が感じられます。

(米林 雄一)



藤井 浩一朗作 《IMAGINE・VEIL》

芝生の中からいきなり現れる愛らしいかたちの彫刻。流線形のフォルムは滑らかで、やさしく触れてみたくなるような造形性が高く評価された。

作品のタイトル通り、この彫刻は設置されて「完成」するのではなく、訪れる人が彫刻と対話を重ねるなかではじめて完成する。

素材である大理石は貝や動物の遺骸などが海底で固まったもので私たちが地球で暮らす遥か昔から存在するため、私たちにやさしくささやいてくれるだろうと作者はいう。

(篠原 聡)



土田 義昌作 《進化景色 (森の集まり)》

彫刻は絵画と違い、触覚芸術と言われる。視覚はもちろん、肌で感じ体感することで鑑賞する者は五感を研ぎ澄ます。

この作品もそう。作品の中に入り込み、直に触れ合うことで普段とは違う感覚に目覚める。ひとときの体験によって、普段見慣れた世界が新たなものになる。その体験は彫刻ならではの醍醐味でもある。

(土方 明司)



谷 明作《アキレウス》

ギリシャ神話に登場する英雄アキレウスがモチーフ。ただし、その脚の部分だけが複数組み合わせられ、しかもまるで厚紙を切ったかのように平面的に構成され立体化されている。不死であったはずのアキレウスが戦死するのは、弱点である踵（「アキレス腱」）を狙われたからだだった。その部分がいちばん目立つように造形されているものの、死の悲劇性というよりも、あたたかいま天から落ちてきたかのような運動する身体ユーモアを湛えている。スポーツ施設の場に相応しい表現である。(水沢 勉)

